話劇《狗児爺涅槃》を観て
―北京から―

小塩　恵美子

昨年11月北京で上演された話劇《狗児爺涅槃》は、北京にセンセイションを起こしたといわれる程の好評を博した。先に工人倶楽部で上演、後に首都劇場に場所を移しても人気は衰えず、北京人民芸術劇院がその次に演出した劇《秦王父子》が上演開始後一週間足らずで切符の売れゆきがさっぱりになった（《北京人芸打了『啞炮』》、《文匯報》86年12月27日）のと比べてみても、その盛況ぶりがうかがえる。11月半ばから劇評がいくつかあらわれたが、その中のひとつは劇場の様子を次のように伝えている。

劇場内には、観衆の笑い声（それは苦笑いである）、強烈な共鳴と交流、それらが私に爽やかな風が吹いて来たような感覚をあたえた。この感覚は八年前、やはりこの劇場で、《丹心譜》を観た時に感じたことがある。舞台上の悲歓離合、述べられているのは当時の人々の偽りのない愛と悔やみの感情である。（顧驤《話劇舞台上的現実主義芸術力量》、《人民日報》86年11月24日）

当時の人々の偽りのない心情を描いたというのがこの劇の評判の原因のようである。だが劇自体は、爽やかなという形容にはとてもあてはまらない。

始まりとともに、狗児爺と祁永年の幻影（元地主の祁永年は既に死亡している）が登場、門楼のシルエットを背景に、祁永年の顔と狗児爺だけにスポットライトがあたり、異様な雰囲気を醸し出す。「お前は人間ではない、幽霊だ」「何をわらうのか」「お前が私にかなわないのを笑うのだ」といった意味ありげな台詞が異様さを一層盛り上げる。

門楼に火をつけることを暗示するこの冒頭の場面は、実際に火をつける最後の場面につながり、その間に狗児爺の半生が挿入されるのだが、核となる狗児爺の心理を表現するため、舞台は装置、小道具を最小限に止め（主なものは時間と場所を示す背景のシルエットぐらいである）、狗児爺の狂気、祁永年の幻影との対話といった心理表現のための設定の効果をきわ

だたせる。

こうして始まった劇は、しかし全体的には喜劇の色彩に満ちている。北京郊外の農村（作者錦雲は通県の出身という）の方言、俗語を多用し、たとえば、解放直前、地主の祁永年と狗児爺が二十畝のゴマ畑の所有権を争う場面は、

祁：このごまは私のだ。私の畑に育ったものだ。

狗：このゴマは俺のだ、俺の袋に入ったものだ。

といったかけあいの調子ではじまる。続いて地主の財産が、洪水で食糧の全くなくなった時に自分の家の屋根に何故か生えてきた香菜を一本一角で売って築いたものであること狗児爺の仇名の由来が父親が二畝の土地を賭けて生きたままの仔犬を食べて命を落とした事件にあること、などに発展して、どちらの出身が卑しいかの罵りあいになるのだが、話の内容自体は、見方によってはかなり凄惨であるにもかかわらず、リズムのある対話と、出身の卑しさという低俗な争いにすることによって、漫才のかけあいの雰囲気をもって観客の笑いを誘う。また、馮金花との見合い（搶寡婦）の場面も、年齢をごまかしたり、畑に出さない、家事もさせないと条件を出し、あの手この手で承諾させる様子がおもしろく、同時に、生活に希望をもちはじめた狗児爺の弾むような心情が伝わってくる。

◆あらすじ◆

北方のある村。狗児爺とよばれる農民がいた。本名は陳賀祥だが父親が二畝の土地を賭けて、生きた小犬を食べて落命したためこの仇名がついた。貧しい狗児爺の最も光栄ある時期は解放直前、戦禍を逃れて村人が避難した後、一人残って地主祁永年の二十畝のゴマ畑を手に入れた時だった。やがて、解放、土地改革。彼も土地と祁家の象徴だったレンガ作りの櫓門(門楼)を譲り受ける。以来、祁家のような豊かな暮らしを夢見る彼にとって門楼はかけがえのない宝となる。暮らし向きは良くなり、馬を買い、若い馮金花を嫁にし、他人の土地を買うまでになる。しかし、合作化、人民公社化運動とつづく中で、土地も馬も手もとを離れ、彼は気が狂い家はまた貧しくなる。金花は他の男のもとに走る。狂ったまま年月は過ぎ行き、大躍進、文化大革命、……。息子陳大虎は祁の娘の小夢と結婚。狗児爺はその間依然土地に執着、荒れ地を耕し続ける。やがて文革も終わり、三中全会の後、土地と馬が戻り、彼も正気に戻る。が、息子は工場を開くため、邪魔になる門楼を壊そうとする。狗児爺には門楼を守る術もない。門楼が壊される前夜、彼は火を放ち姿を消す。（小塩恵美子）

【シナリオは、劇本86-6、新華文摘87-1】

核は狗児爺の心理である。時代の変動につれてその時々の彼の心情を、彼自身の独白と祁永年の幻影との対話（彼にしか見えない存在との対話は形をかえた独白である）を軸にして表現する。

土地に執着し、戦火をものともせずに村にひとり残ってゴマ畑を手に入れる。友人蘇連玉の土地を三石のゴマとひきかえに買おうとする。やっとのことで結婚を承諾させた馮金花を、結婚後にはこき使う。といった様子を織り混ぜながら、善良さと身勝手さを兼ね備えた狗児爺が描きだされていく。それは《不能走那条路》の時期に既に否定されたような「偏狭な思想」をもつ農民が、力強く生き残っているのを示すとともに、そうであるだけにより存在感のある人物となっている。観客は、合作化によって土地を失った時の彼の悲憤の叫びに同情し、地主の娘祁小夢をかばう文化大革命中の彼の言葉に共感しつつ、彼の生きた時代における普通の人々の心情の代弁者として、彼を身近に感じとっていく。狗児爺の心理表現において、狂気による世間との隔絶という設定、祁永年の幻影との対話という形式が当時表だって出てくることのなかった人々の内心を組み込んでいることに注目しておきたい。その心情の表現は特に文革中の状況を批判するところでは、当時発言できなかった、観客の心にあるわだかまりを昇華、消滅させる自己満足的作用も果たすのではないかと思われる。（その対極にある「発言できなかった」人々の立場を示すものとして、村長・李万江、妻・馮金花の心情の吐露がおかれている）そして最後の場面、門楼が壊されるのに守る術を持たない狗児爺に、ひとつの時代の終焉、時代の移り変わりを実感させられる。

意識下の世界の表現について、この劇が完全に自然な形で人物の心理の深層に迫っているかどうかに少々疑問の余地がある。先にも述べたように狂気によって世間を顧みなくなった狗児爺の言動は、一種浄化されたものとなり、現在から振り返ってはじめて可能なきれいごと的部分もあるからだ。しかし、かれの胸中に一貫して存在する、かなわぬ対象としての地主時代の祁永年の暮らしと自己のそれとの比較、土地の獲得（＝豊かな生活の保証）への執着を、彼の意識下にとらえて執拗に追いつづけ、強烈な印象を残す性格に仕上げた点で、心理の表現は充分な効果をあげたといえる。

合作化によって土地を失う場面では、村長・李万江が訪ねてきて酒を一杯二杯とのみすすむうち、合作に参加しないかという話になる。そうすれば、皆の力でまたたく間に電気も電話も牛乳もビスケットもある生活にな

るだろう。

俺は言った。いやだ。彼が言った。お前はごうつくばりだ、土地虫だ、三度斧を振っても割れない頑固な楡で、頭に石が詰まった保守思想だ。俺は焦った。

地力の劣る土地との交換。そうしなければ大々的に“黒い膏薬”にされる。換えなければ合作だ。妻も、土地を皆のものにしないなら、家から出ていくという。

話は耳を突き酒は心を突く、家神が外鬼を招き、内から外から板ばさみ、逃げ道なんかない。それで皆のものになっちまった。皆のものに.. ..この土地、さえもなくなった。おやじさん、小犬を、── あんたは無駄にくったんだ！俺は、あんたに会わせる顔がない....。

そして彼は気が狂う。土地に対する執念はこの後も衰えない。その執念こそが狗児爺だといえるほどの強烈である。だがこの独白にみえるような合作化への複雑な心情が土地に生きてきた人の心をあらわしていないといえるだろうか。その土地への執念や自己中心的な考え、また一方での善良さが、解放後の時代の変動を経ても変わらない「三千年余の農民」（前掲《話劇舞台上的現実主義芸術力量》）の姿に重なるのだろう。

ならば、新しくやってくる次の世代はそれを踏み越えて全く新しい性格を作り出すだろうか。

門楼の焼失が時代の移り変わりを示していることは確かであるにしても、新しい時代を象徴する息子陳大虎の生き方は必ずしも肯定的に描かれてはいない。

陳大虎は自分の開く工場の邪魔になる朽ちかけた門楼を、父親のそれに対する思いを感傷と退けて壊そうとする。それがために祖父が死に、父が狂った「土地」を捨てて企業経営に進もうとする。そこにはドライな考え方をする次の世代の「財迷」の姿がある。彼らの強みも弱みもその“合理”性にあるだろう。が、自分の工場のために車で奔走する大虎は、狗児爺が土地に執着したのとかわらない次元で、今の時代の良い暮らしを勝ちとろうとしている。そうした次の世代は、狗児爺が翻弄されてきた時代とその時代における人間のありように対する明確な事実認識と理解のないままに出現しつつある。移り変わる時代は古い時代と同じ基盤に立って人々を翻弄していく可能性をもち、それにもかかわらず人々の生き方はすこしも変わっていない。陳大虎もまた、土地から工場への違いはあるにせよ、狗児

爺と同じ「財迷」の、同じように翻弄される道を歩むように思えてならない。作者はそんな次の世代の富にばかり目がむく面に危惧を抱いているようである。（《 着収穫的泥土　注視農民的命運》、《文匯報》86年12月15日）。その危惧は次の時代を背負っていかねばならない者として当然なのだろう。だが、私は、狗児爺から陳大虎へと移っていく時代における、人々の生き方の変化の無さ、時代が変わっても脈々と続くあまりにも変わらない庶民の列の中に置かれたからこそ、狗児爺の形象は生きてくると思うのだ。その列の中の一断面になるからこそ、彼の執念は特別なものではない存在感をはなつ。門楼の焼失はひとつの区切りでしかない。その点で、一部の評論の示すような（たとえば童道明《新的戯劇現実主義》、《光明日報》86年11月13日）、時代の移り変わり＝新しい事象・人物が期待を浴びて出現するという観点と、この劇との距離を感じてしまうのである。

原稿と例会参加のおねがい

次号は、馮驥才の小特集を予定しています。馮驥才についての原稿をお寄せいただける方は、会または会員までご一報くだされば幸甚です。

例会は、一カ月半に一回のペースで開いてすます。会場は東京都内、土曜日の午後です。最近は、中篇小説を読む機会が多く、準備もなかなかたいへんなのですが、そこは、電車に揺られながらの斜め速読法(誤読法？)など、さまざまな工夫をこらしながら耐えています。ぜひ気軽に(？)ご参加ください。例会のほぼ一カ月前にご案内をさしあげます。参加ご希望の方、あるいは“こんな人がいますよ”といった情報をお持ちの方、会または会員までお知らせください。

林途昆饰演的狗儿爷
张振声速写

光明日报
1987，1，4